

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	つくばだいがくふぞくさかどこうとうがっこう				②所在都道府県	埼玉県
26～30	① 学校名	筑波大学附属坂戸高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	1学年160名(1クラス40名×4クラス) 全校486人(6名:4年次生) 全日制・総合学科	
総合科学科	40	60	80		180		
⑥研究開発構想名	先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成						
⑦研究開発の概要	全生徒に対する地球市民性醸成プログラムとグローバル・リーダーを育成すると共に、 <u>アセアン諸国と連携した2年生から取り組む課題研究プログラム開発(インドネシアにおける3週間フィールドワーク・筑波大学における英語論文指導およびゼミ指導)</u> および <u>1年次から取り組む課題研究基礎(キャリアデザイン・校外学習)</u> を開発する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標 総合学科の特性(全員必修の課題研究、生徒の多様性、教員の多様性、柔軟なカリキュラム、キャリア教育)を活かした多様なグローバル・リーダーをアセアン諸国と連携して育成することをめざす。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説 本校は、総合学科で、20年間すでに課題研究に関する実践をつみ、国際教育にも積極的に取り組んでいる。課題として1)国際的な課題に関して関心を持つ生徒が全校的に広がっていない、2)1年間の課題研究では、国際的な課題に対して内容を深め実践的な研究をするまでには至っていないことがある。本校では若者がグローバル・リーダーとして活躍することを阻害している要因は、1)自己と世界のつながりに関する認識不足と、その機会の不足、2)外国語を運用することへの苦手意識や、外国語学習に対する動機づけの低さ、3)実践的な国際現場での経験不足にあると考えており、これに対応したプログラムを実施できれば多様なリーダーを育成できると考えている。</p> <p>(3) 成果の普及 管理機関と協力してSGH専用のホームページを立ち上げ、その中でSGH校やその他の学校と、課題研究テーマや研究開発成果についてディスカッションする「つくば版パブリックコメント」の欄を設ける。研究開発成果を企業や関係行政機関へ提言したり、パブリックコメントの範囲を外国にまで拡げ、地球規模で課題を解決する体制を構築する。 総合学科高校向けには、本校が主催し毎年2月に開催している総合学科研究大会において成果を公表する。また、平成24年度から実施している高校生国際ESDシンポジウムを全国の高校生も参加可能なオープンなシンポジウムにして、その成果の普及に努める。</p>					
	⑧-2課題研究	<p>(1) 課題研究内容 共通の柱として「<u>多様性の中の統一を国是とするインドネシアからSDGs時代に世界と日本が学ぶこと</u>」を設定し、<u>2015年以降、先進国と途上国が普遍的に協働し実践する国連持続可能な開発目標(SDGs)を達成するために高校生の今だからできる課題に2年間にわたって取り組む</u>。具体的なテーマ例としては、以下のようなものを想定している。<u>(環境)</u> 森林保全のための小学生向け環境教育プログラムの開発、企業CSRによる熱帯林再生プロジェクトの効果測定、<u>(経済・産業・国際関係)</u> グラミン銀行方式(マイクロクレジット)による自律的地域振興、森林保全と地域振興を両立するBOPビジネスモデルの提案、<u>(震災)</u> スマトラ沖大津波と東日本大震災で両国が共有できること、福島県産大豆を用いたテンペ(インドネシアの大豆発酵食品)製造による地域活性化、<u>(文化・社会)</u> 農村地域の聞き書きによる伝統文化の変容測定、など多様なテーマが考えられる。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 既存の課題研究(校内名:卒業研究、3年次対象2単位)に加え、1年次では、「キャリアデザイン」のなかで、近隣在住の外国人等を招へいし国際的な課題に対する基礎的</p>					

	<p>研究力を養成する。また、生徒全員がカナダで「校外学習」を行い、バンクーバーにおいて移民に関する調査、国立公園で森林や地域開発について学ぶ。2年次では<u>インドネシアにおける3週間の国際フィールドワーク</u>を実施。インドネシア政府、国立公園、ボゴール農科大学、現地企業およびNPOの協力を得て「インドネシア100年の森プロジェクト」として行う。ボゴール農科大学附属コルニタ高校およびインドネシア政府林業省附属高校の高校生も参加する。1, 2年次対象で調査研究のための「インドネシア語講座」を開設する。3年次では個人でテーマ設定を行い課題研究を行う。SGHの課題研究テーマはアセアンに関するものであるが、より多くの生徒が国際的な課題研究に取り組めるように促す。必要な生徒は海外に再度派遣し研究を行う。また<u>英語論文作成やゼミ指導を筑波大学で合宿形式行う（課題研究合宿）</u>。検証評価は、2年次はインドネシア政府林業省での発表、現地小学校での生徒による出前授業の内容、3年次は、作成された英語論文の内容と、論文を評価されたことによる大学への入学者数で評価を行う。2年間を通じて、各自の「ポートフォリオ」に、フィールドワーク等の記録と小論文、課題テーマに関する論文、教員や大学生とのディスカッションの記録と感想文などをファイリングして、年度末には、生徒自身が高校の教員、筑波大学の教員や学生と振り返る。平成26年度はとくに、筑波大学附属教育局で開発した「国際的資質質問紙」による調査を年度当初と末に行い、生徒の変化の縦断的評価を行い、試行プログラムの検証も行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 「インドネシア語講座」「国際フィールドワーク」「課題研究合宿」を時間外の科目として各2単位認定を行う。</p>
<p>⑧ -3 上記 以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 ○英語による基礎的プレゼンテーション力育成（1年次） 「コミュニケーション英語」と「社会と情報」のタイアップ授業 ○国際化を身近な課題として意識させる「グローバルライフ（仮称）」の授業開発 「日常生活」から世界とのつながりを感じられる授業の開発。家庭科と他教科の連携 ○国際特別演習の開講（3年次対象：土曜日） 土曜日を利用した研究所訪問やNPOとの活動 上記の検証評価も、「国際的資質質問紙」による調査を実施する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 必修科目である「家庭基礎（2単位）」について研究開発科目「グローバルライフ（仮称）」で代替する。適用範囲は1年次在籍生徒160名とする。「国際特別演習」について時間外の集中科目として単位認定（各講座2単位）を行う。</p> <p>(3) <u>グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の実施内容・実施方法</u> ○<u>グローバル入試の実施</u> 在日外国人特別入試および在外日本人学校生特別入試を平成27年度生から実施する。 ○<u>SCIS (Student's Committee of International Studies) を立ち上げる</u> 平成20年度にたちあげた国際教育推進委員会の生徒版をたちあげ、高校生国際ESDシンポジウムの運営や国際交流活動を中心となって行う生徒の委員会を作る。 ○<u>高大接続入学の実施</u> SGHプログラムを履修した生徒が、筑波大学へ入学できるシステムを構築する。筑波大学生命環境学群生物資源学類への接続入試から開始し、他学類へも広める。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>インドネシア政府および駐日インドネシア大使館と連携し実施する。また、筑波大学が国際連携協定を結び本校とも交流が進んでいる、タイ・カセサート大学およびその附属高校、フィリピン大学およびその附属高校とも連携して実施する。</p>